

オープンスクール特別講演が行われました



6月25日(土)にオープンスクール特別講演として、釧路湿原をフィールドにして野生動物専門の獣医師として活躍されている齊藤慶輔先生をお呼びして、「野生の猛禽を診る」というテーマでお話をいただきました。

齊藤先生は1994年より20年以上にわたって釧路湿原を中心に猛禽類の保護と治療に取り組み、2005年には自らその地に猛禽類医学研究所を設立して、その代表を務めている。

講演の最初に、彼が目指していることは、野生動物との

「共存」のみならず、「共生」ということを強調していました。これは野生動物を絶滅させないようにするためには、ただ残すということだけでなく、ともに生きるための努力を人間は怠ってはならないという、彼の強いメッセージであると感じました。

釧路湿原にはオオワシ、オジロワシ、シマフクロウなどのいわゆる肉食の猛禽類が多く生息していますが、いずれも人間がもたらした様々な要因でその生息数を減らしている。齊藤先生は、傷ついた猛禽類の治療を行い、時には野生へ戻れるようにリハビリにも取り組んでいます。しかしそれだけでは問題の解決にはならないと考え、人間が作り出した猛禽類にとっての危険な環境を改善することにも努めています。



例をあげると、風力発電機へのバードストライク、電線への接触による感電、道路での交通事故、ライフル銃の鉛弾で撃たれた鹿を捕食することによって起こる鉛中毒などがあげられます。このような問題を解決するためにそれぞれの担当者との連携や協議を通じて、改善のための提案や助言にも努めているとのことでした。利害や目的の異なった異業種の人たちを巻き込んだこれらの取り組みは、特に素晴らしいものだと感じました。

たとえば、電線にはその鳥にサイズにあわせた、感電しない仕組みを開発して、実用化していることや、道路での衝突事故を防ぐためのアスファルトの工夫、鉛中毒をなくすために鉛弾を銅に切り替える

取り組みなど、聞いていて思わず関心するものばかりでした。自分の専門以外のことでも、人の力を借り、一緒に知恵を絞ることで、野生動物との「共生」に向けた取り組みは着実に前進させることができるのだと感じました。

最後にメッセージとして、これからの世界を生き抜き、問題を解決するために「なぜ、どうしてを追求する心」

「他人と協調するためのコミュニケーション能力」を大切にして欲しいと言っていました。また身近に野生動物のいない環境で暮らす我々にも、先生の実践を理解して、この現実を深く知ってもらい、周囲の人にも伝えて欲しい

と力説していました。先生の熱意あふれる取り組みや熱いメッセージは、「環境共生」をメインテーマにSSHに取り組んでいる生徒たちにとっては深く心に染み渡るものでした。

